

皆竹を以て作れば、床はさらなり、柱も障子も、薪までも皆竹を用ゆるなり、その男女は終日竹の事にのみかゝりて、別に農業を勤むる事もなし、これは古よりの竹村なれば、三度の飯にも竹筍の乾したるを糧とし、小兒の時より痘瘡も至て軽くして、壯健なる事世にたぐひなし、また別に惡病も煩ふ事なれば、醫を頼む事もなしと、それをのみ土人はほこりがほに物語しけり、又筍を製するには、柔き比探て湯に浸し、或は蒸などして、日に乾し、用ふる時に水に浸し、煮て食するに、其味殊によろし、凡半里餘も左右皆竹林にして、其道傍に材木を積みたるが如く、竹を切て積置、或は輪竹にして近國へ出し、また屋材の用に供す、凡かくの如く、竹の夥敷ある所は、世にはまたとあるまじきなり、扱その家居のさまは、皆人々の巧にまかせて面白く作りしものなれば、中々に言葉には述難しといへり、和訓栞に、漢竹豐後より出るといへるは、蓋し此村の事なるにや、本朝俗諺志云、相州西郡の内金子村さかわよ二里半に、金子市左衛門といふ百姓あり、此籜の竹一尺八寸廻り、六七間の末にて一尺廻り程あり、籜はやうく十間に廿間ばかり、一間に一本づゝあり、めづらしき竹籜なり、此竹所望すれば、最初の契約にて根からはきらず、三尺ばかり上より切て、切口に何か薬をぬり、竹の皮にて幾重も包み、大切にする也、

胡竹

〔撮壤集中〕胡竹

〔倭訓栞前編古九〕こちく一八雲御抄に胡竹也と見え、律書樂圖に横笛本出於差也と見えたれり、拾芥抄には吳竹と見えたり、又周禮に孤竹之管、注に竹特生者と見えたれば是にや、後拾遺集に、いつかまたこちくなるべき鶯のさへづりそめし夜半の笛竹、此方へ來といひかけたる成し、千載集にもよめり、

翁竹

古今要覽稿草木木おきな竹
翁竹一名。奎目竹は漢名を問道竹といふ、其幹節并に苦竹に似て、高さ一丈餘、圍み四五寸に至る、